観瀾での私

外国語学部中国語学科３年　原澤真理

私は２０１０年7月28日から8月12日のA日程に、孫先生が勧めてくださった、深センテクノセンターインターンシップへ参加した。動機はいくつかあったが、そのうちの一つが「本格的な就職活動を前に、今まで自分がやったことのないことに自発的に挑戦したい」というものであった。これまでの私は、その好奇心旺盛な性格から色々なことに興味を持ってはいたものの、親の意見に従って挑戦するかしないかを決めていたことがあった。しかし、もう20歳も過ぎ、この夏が過ぎれば就職活動という大きなイベントが待っている。今のままの私では、到底戦っていくことなどできないだろう。そのような思いを打破するべく、私はこのインターンシップで一皮剥けることを決心した。

まずは情報集めから入った。私は偶々同日程になった同じ学科のMちゃんと一緒に行くことにしていたので、テクノセンターの概要や、テクノセンターに属している企業の調査、また、目的地までの交通手段等の情報を、テクノセンターの本やホームページ、インターネット上の体験談、それから村井先生にお借りしたDVD等から協力して集めた。神奈川大学初の参加生となるので、聞ける人がいなくて情報集めだけでも苦労した。この段階でのテクノセンターのイメージは、日系企業が沢山あって、来料加工というものを行っており、食事がまずくて生活しにくいというものであった。大雑把なイメージしか持っていなかった私は、とにかく不安と期待でいっぱいだった。

実際にテクノセンターへ行ってみると、まずはその目的地までの道のりがなかなか大変だった。私たちは7月26日から28日までの二日間を香港で過ごし、28日の午前中にテクノセンターへと向かった。電車は意外とスムーズに乗ることができた。しかし、羅湖で土砂降りの雨と雷に見舞われたため、タクシー乗り場まで行くだけでも大変な思いをした。運転手と値段交渉をして行き先を告げるも、よくわからないようであったが、取り敢えず向ってもらえることになった。しばらく走ると、道路がコンクリートから土へと変わる場所に来た。交通規制が守られていないような道で、中央線もないのでぶつかりそうな車を何台も見かけた。けれどそこは流石中国人とでも言おうか。事故を起こした車は勿論、擦った車でさえ見かけなかった。目的地へは、途中で何回も道を聞いて、やっとのことで辿り着いた。その後、事務室へと案内され、

そこで初めて同じインターンシップ生に会った。それからゴザや布団、タオルケット、枕、バケツ、桶、洗面器、ハンガーを受け取り、寮へ向かった。私の部屋は３０４号室で、Ｈ大学のえっちゃんと同年代の中国人ワーカー四人の計六人部屋だった。部屋にはクーラーや暖房器具はなく、天井に大きな扇風機が二つ付いているだけだった。

ワーカーはまだ仕事から帰ってきていなかったので、私とえっちゃんは空いていた二段ベッドの上段を使わせてもらうことにし、暫く二人で話していた。えっちゃんは一年間香港大学に留学していたので、広東語がぺらぺらだった。ワーカー四人が揃ったときに、そのうちの一人と広東語を話していて格好良かった。私は中国語学科であるにも関わらず、あまりうまく会話することができなかったので少し落ち込んだ。ワーカーの謝さんは、私たちに麺料理をつくってくれた。麺と野菜と卵を混ぜたもので、味噌汁の味がして美味しかった。

私は寮の中で一番驚いた設備があった。それは、シャワーである。なぜかと言うと、部屋には日本の和式トイレのようなものが二つあり、片方には上部にシャワーが設置されていたので、片方はトイレ、もう片方はシャワーとして使用するものだと思っていたが、ワーカーはどちらもトイレとして使用していたからだ。その事実を目の当たりにした私は、暫く「ここで生活していくのは無理かもしれない」と思ってしまった。

初日の感想としては、まずシャワーが水しか出ないのでお湯を汲んでこなければならないということ、そしてトイレに落ちないようにその狭い空間で着替え等をしなければならないということ、それから洗濯も手洗いで行い、手で絞って干さなければならないということに慣れていないため、何十分もかかってしまい、疲れ果てるというものだった。それでも、実際に使用していくうちに慣れていき、五日もたたないうちにそれが普通になっていった。

二日目は、オリエンテーション後、メンタルケア講習会に参加。やはり、若いうちからずっと働き詰めだと、精神的にも辛いのだということが分かった。その後、企業へのアポ取りを開始した。ストライキが起こっており、近づくことのできない地区もあったが、何社かはアポを取ることに成功した。大体初めは中国人が電話に出るので、香港大学の生徒に変わり、日本人に繋いでもらったら私が交渉するという形で行った。自分でアポを取るということは初めての体験だったので、とても緊張した。それからの空き時間は、近くのスーパーでお菓子を買って食べていた。美味しいものもあれば、これは食べ物なのかと疑いたくなるようなものもあった。

三日目からは、ほぼ毎日アポ取りに成功した会社で見学させてもらった。一日大体二社から三社で、P社では短時間だったが実際にライン実習をさせてもらった。各企業の方々にお話を伺ってみたところ、中国に来たきっかけは人それぞれだったが、中国人ワーカーについての見解としては、「独創性が強いためコントロールが難しい」、「日本の小学生に教えるようなもの」ということであった。また、中国に住み続けているうちに中国が好きになった方もいれば、もう帰りたいという方もいて、その人によってこうも違うものなのかと思った。

初めのうちは人見知りという性格から、私は班にあまり溶け込めなかった。また、不自由な生活や不十分なコミュニケーションによってストレスが溜まっていくのを感じた。何日かして、それが小さな爆発を起こすのだが、一人になって反省したり、沢山寝たり、同じインターンシップ生に相談したりすることで発散することができ、次の日からはすっきりした生活をしていくことができた。皆とも仲良くなることができ、寮の前に設置されている卓球やバドミントンで沢山遊んだ。時々ワーカーとも対戦し、とても盛り上がった。休日には大通りと呼ばれている道で出店を周ったり、香港へ遊びに行ったときに香港大学の寮に泊まらせてもらったり、Fさんの家に遊びに行かせてもらったりした。どれも滅多にできない体験で、新鮮で十分に堪能した。

私がこのインターンシップに参加した動機は初めに述べたとおりだが、それでもえっちゃんやTさん、YさんをはじめTさんやKさん、Fさんを見ていると、同じインターンシップで似たような生活を送っているにも関わらず、その内容の濃さに差があるように思えた。もちろん目的は人それぞれだが、それでも研究していることやヒアリング時の質問内容、語学力、コミュニケーションの取り方等、私は圧倒されっぱなしだった。これが社会人になるということで、私がこれから戦っていかなければならない課題なのだと改めて考えさせられた。特にコミュニケーションの取り方については沢山課題があった。ある日、「自分に自信を持って」とFさんに言われてはっとした。今まで人と関ることが苦手だったのは、人見知りで気分屋という性格の所為だと思っていた。しかし、この時初めて「自信」という言葉と私自身の関係について考え、そして気付いた。私は自分に自信がない。自信があるように振舞っていても、自分の意見は言わないところがある。それは他人を優先してあげようという気持ちから来るものだと思っていたが、同時に否定されてぶつかることが嫌だからという保守的な面があったのだ。このことに気付いた時、私は少し戸惑いを隠せなかった。だが、すぐに感謝した。このように私だけでは気付かなかったこと、周りの人々が教えてはくれなかったことをFさんはわざわざ教えてくれたのだ。自分を変えることはそう簡単にできることではないが、これから少しずつ努力していこうと思う。（ちなみに、最後に香港で別れる時、Fさんはこの言葉をピンポン玉に書いて私にプレゼントしてくれた。）このインターンシップでは本当に沢山のことを学んだが、私にとって一番の収穫はこのFさんの優しさによって私自身と向き合って気付くことができたことだ。長くて短かった深センテクノセンターインターンシップだったが、参加してよかったと心から思うことができる。

最後に、このような素敵なインターンシップへの参加を勧めてくださった孫先生をはじめ、素敵な笑顔でとても為になるお話をしてくださった石井さん、優しく面倒を見てくださった西村さん、様々なお話をしてくださった各工場長の方々等、沢山の人々にお世話になりました。ありがとうございました。